

私達は今、自然を見直し、人間との調和の中に幸せを見出そうと運動し、勉強して居る中で、人間の欲望の限界を感じ、すべての人がもつとすなおに幸福の原点を考へるようになれないものかと思う。

ふるさとの川のある町の思い出の中に生きて、これからの自分を考えさせられる今日此の頃である。

自然と愛と

飛田君枝

あなたと山の話をした

「自然のあらがいはないはずよ

自然は人間に愛されていることを

知っているから

愛するものには拒むことができない

女のさがみたいにね」

かたにあらわさなかつた
愛は風化する

むかし

わたしは自然の頂を求めて

山に登り

生と死と一重のはざまを

幾度か通りすぎた

かさなりあう道松の上を

雲は

青春の幻影のように流れた

芽ふいたものがすべて伸び

花ひらいたものが

実を結ぶようにと

自然の中では

貧乏な欲望がせきあえぐ

しかし 人間は知っている

淘汰されるものの悲しみを

山はいま

わたしの中で

守られていたいという

少女の感情より

積極的に守っていききたいという

女のすがたに

成長した